
聖嶺学院 創世学科(仮)

maplekakka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖嶺学院 創世学科（仮）

【Nコード】

N8346I

【作者名】

maplekaka

【あらすじ】

創世という分野が開拓し始められたころのお話。

主人公、穂高連は聖嶺学院に入学した、しかし彼は78日間毎日遅刻し続けるという生活ぶり。そのまま1年が経ち、2年生になってとうとう実技を学ぶときになった彼は……。

01： 2年生進級（前書き）

どうもはじめまして。メイプル閣下です。所詮自己満足の作品です。読者の皆さんに楽しんでもらえるとは思えないのですが、暇だったら目を通していただければと。

01： 2年生進級

梅雨が明け、（いち）活気を取り戻し、町は喧騒に包まれていた。この町の朝早い。朝の日差しに雫は七色に輝き、青年はまだ虚ろな目をゆっくりと開いた。

「ううーん、ふう。朝か、もう少し寝て痛かったんだけど。たまには早起きもいいかな。」

彼の一日は乱れた髪を片手でバサバサと振ることから始まる。その行為にこれといった意味はないのだが、眠気を振り払うためであるうか、いつしか習慣となっていたのだ。次に手を洗い歯を磨く。朝食前に歯を磨くのが彼流だ。

「さーて、今日は間に合いそうだな。そういや俺が遅刻せずに学校に行くのって何日ぶりだか。みんなどんな反応を見せてくれるかな。夏美なつみなんか、『今日は雪が降るかもしれないわー』なんて言ってくるかも。」

実際、彼が遅刻せずに学校に行ったのは78日前だ。つまり2ヶ月以上も遅刻し続けている。それでも学校に行くだけ褒めるべきかもしれない。彼ほど日々の生活を悠々ゆゆう自まに過すごしている学生はそういない。

始業のチャイムが鳴ってグレーのスーツに包まれたおじさんというにはまだ早い男性教師が教室に入ってきた。

「おーいみんな、静まれ静まれ。興奮するのは分かるがそうギャーギャーされるといつまで経っても始められんぞ。」

「先生、僕たち今日から2年ですよね、ってことはとうとう創世学を学べるんですよね。」

「せんせー、私早く自分の適性知りたいですけどー。」

「あの、俺 - 次元翔じげんしやう - 先輩や - 精霊庭せいれいてい - 先輩みたいになりたいんだけど。」

「ああ、もう、分かった分かった、分かったからちよつと黙れ。お前らなあ、 - 次元翔 - や - 精霊庭 - は5年の中でもトップを争う連中だ、それにそもそも適性がないかもしれないぞ。まあいい、みんな、2年生進級おめでとう。君らには本年度から創世学を学んでもらう……。」

教室中に割れんばかりの歓声が響く。これも当然というば当然である。ここ、聖嶺学院せいれいがくいんは6年制の私立学園で、全国でもまだあまり広がりを見せていない創世学を学べる数少ない学び舎である。そして、1年は主に座学、2年から実習となる。

「ねえ、連れん、いまさらそんな話しなくても、みんな知ってるわよね。創世使いは憧れの的なんだから。」

彼女は白石夏美しらいしなつみ、身長は155cmくらいで俺よりも頭ひとつ小さい。水の流れるようなさらさらとしたロングの黒髪は方から背中にかかっている。誰もが見とれるような滑らかな肌に、ふんわりとしたくちび……。

「って俺は変態か！」

うっ、夏美に睨まれた。そりゃそうだ、突然変態だなんて言い出すやつがいたらどう考えても変態だろう。あーどうしようかな、まずいよこの空気……。

「ねーえ、何ぼーとしてるのよ。連は創世学やるのうれしくないの？」

「うーん、まあ、興味がないうわけどもねーけど、別に何したいとかないし……。まあそんなところ。」

「ふーん、私はやっぱり・精霊庭・みたいな能力がいいな。かわいくてかつこよくて、さっき春も言^はってたよね。人気あるなー。」

01： 2年生進級（後書き）

自分で読み直してあー下手だな、と思ってしまいます。
が、ここは気にせず突っ走ります。のちのち矛盾が生じる？
気にしない。

そうそう、更新日はほんとまちまちです。

02： 適正診断

「・・・であって、創世学の歴史は始まった。創世と言っても世界を創るわけじゃないぞ。世界のあり方をちよつと変えるんだ。その意味では変世学とでも言ったほうがもいいかもしれんが・・・」

また先生の講釈が始まった。この先生は何度言われたら分かるんだ。もうその台詞は何回も聞いた。案の定生徒のほとんどは内職をしているか寝ているかのどちらかだ。

「ところで夏美、-精霊庭-ってどんな能力なんだ。」

「ええ！知らなかったの。ああ、これだから連は・・・。いい、よく聞いてね。-精霊庭-は聖属性、現5年生の^{先輩}の創称で、ああ創称するのは2つ名のことね。」

「俺だつてさすがに創称の意味くらいは知ってるって。」

「そうね、何回聞かせられたか分からないもんね。それで、精霊を召還する能力よ。精霊は確かに世界に存在してるんだけど、精霊の世界は別のところにあるみたい。その世界から精霊を呼び出して顕現させるそうよ。臯先輩の両脇に控える精霊と言ったらあまりの神々しさに気が引けちゃうって感じかな。それより、学校創設以来初の女性生徒会長よ、これくらい覚えていなさいよ。」

「まあまあ、そついやそんな気がしてきた、そんで-次元翔-が副会長だつて。」

「えー、創世にはいくつかの属性があり、有名なのは火・水・風・

土でこれを四大属性と呼ぶ。次に聖・邪・時・無、これらは高位属性だ。準属性とも言つな。まあ詳しいことはおいおいやっていくとして。」

「とここで教室にチャイムが響いた。ふう、先生がなんだか言つた気もするけど、やっと1時間目終了か。」

「おーい、連、お前今日は遅刻せずに来たんだな、78日ぶりか？次は測定室だぜ。早くしろよ。」

俺が遅刻した日数までちゃんと覚えているアイツは風間桂悟^{ふうまけい}。クラス一の成績を誇るが、俺なんかと気が合う変わり者だ。それでもクラスの信頼は厚いのだからすごい。反対の校舎だから、俺もそろそろ移動しないと。」

「みんないるかー。いねーやつは適正診断できねーぞ。じゃあ順番に並べ。測定が終わって一人出てきたらこっちのゲートから一人入ってくるように。私語は許す、どうせ完全防音の控え室だからな。青木、お前からだ入って来い。測定は5分とかからないから安心しろ。」

出席番号1番の青木が入っていく。こういうときって1番はどうなもんかな。1番初めに結果が出る喜びがあるけど、1番初めという恐怖があるからな。俺は特に楽しみじゃないから1番でなくて幸いだ。

「ねえねえ、わくわくしてきたよー。聖属性じゃないと - 精霊庭 -

見たいな能力は使えないから・・・聖属性に近いのは風か水よね、私は風がいいな！。」

一息にそこまでまくし立てる。こいつどんだけ興奮してんだよ。つといつつつこみは心の中だけでしておこう。どうせ言って無駄だこうなった夏美は止められやしない。

「そうだな、俺は何だっついていいが、っあ能力値はどうなんだ。」

「どうなんだっって言われても。高いに越したことはないけど属性が優先よ。能力値は努力しだいで上がるけど、属性は派生することはあってもちよつとやそつとじゃ、それこそ事故にでも遭わない限りね変わらないもの。」

次、白石夏美

「じゃあ行ってこいよ。ちゃんと結果教えるよ。」

「はい、分かってるわよ。」

「連は相変わらず白石と仲がいいな。幼馴染だからか？それとも・・・？」

「ばっか、そんなんじゃねえ、それにおまえなら全部分かってて言うてるだろ。で、あらかじめ言つとくと俺は適正に興味はねえからな。結果を受け入れるだけだな。」

俺は桂悟の軽口を軽くあしらう。いつものことだ、ほんとなんらかわりやしねえ。

「ほー俺が聞きたかったことを答えてくれるとは、内容は別として慧眼だな。俺としては、マイナーでありながらその能力は他の追従を許さない、というものを所望したいのだが、調べた限り該当する属性は見当たらなかったのが残念だぜ。おー、そうこうしているうちに白石さんのお帰りだぜ。」

「ただいま、うーん、風属性じゃなかった。」

「そっか、じゃあ何だったんだ。火か水か土か。」

「そうね、水よ。風も水も聖に派生するから、よかったといえばよかったわね。」

言葉ではそう言っているものの、やはり浮かない様子だ。もうすぐ俺の番も来るが、ここは何と声をかけるべきなんだろう。

「白石さん、そんなに心配することじゃないぜ。水から聖になる人も多いし、臯さんだって3年の後半まで水だったらしいからな。」

つくこいつは俺の前でこんなフォローを。だがなぜ2年のお前がそんなことを知ってるんだ。

「何でそんなことを知っているのか？つて顔をしてるな。簡単だぜ、何と言っても会長だからね、図書室に行けば歴代会長の情報なんてあつという間だぜ。」

「うぬぬ、返す言葉もない。現会長のころから資料が作られて、自由にみることができると危なくないか、その、プライバシーの観点から。」

「そうだね、だから個人情報全般はある程度の権限がないと閲覧を許されない。たしか司書でも閲覧できないはずだぜ。そこらへんの情報は学校側の管轄だからな。」

「ふーんそんなもんか。そういや、忘れてた。おまえは夏美より番号若いんだから測定終わってるよな。どうだったんだ。」

そのとき、桂悟の目が若干細まり、表情が硬くなった気がした。

「俺は・・・、また教えるよ。」

何か言いかけたまま、そそくさとその場を立ち去ってしまった。あいつにしては顔がこわばっていたし、なんとも煮え切らない。何か悪い結果にでもなったのだろうか、親友だったら教えてくれてもいいのにな。

次、穂高連

「おつ、やっときたな。それじゃ行っていくな。」

「うん、結果楽しみにしてるわよ。」

どうやら夏美は純粹に楽しみにしているようだ。そんなに他人の結果に興味が沸くものかな。ともあれ俺は測定室と書かれたゲートをくぐる。

02： 適正診断（後書き）

前回の2倍くらいになってしまった。

明日からアメリカに行つてきますので1週間は更新できないでしょう。

一応途中までは手書きできてはいるのですが、設定があまり気に入っていないため、最初から全部書き直すべきかもしれないです。いまのところ創世を実際に行使していませんし、原理も記述してありませんのであとから何とでもなるっしょという楽観的な思想の元書いておりますので悪しからず。

03： アクシデント（前書き）

アメリカ良かったです。現地の高校の生徒に日本文化の紹介をしたのですが、よろこんで作ってくれました。機会があったらまた行きたいですね。

03： アクシデント

中はもつと研究室然けんきむつしつぜんとしていているかと思つたがそうでもない。三方は真つ白、残りの一方にミラーがあり、上にモニターがついていいる。どうやらそこに結果が表示されるようだ。そしてこの殺風景な部屋に不釣合いな、妙な装置のついた椅子が部屋の中央に佇たたずんでいる。

「穂高連、ただいまから測定をはじめます。中央にあるシートに座り、ベルトを締めてください。固定完了後次の指示を出します。」

違和感のない合成音声はもう聞き飽きている。この学校ではよく、校内放送がこの抑揚がなく、男女の区別もつかない声でされるのだ。俺は指示通りにベルトを装着する。

「次に右手側の端子を右こめかみに、左手側の端子を左こめかみにそれぞれ押し当ててください。自動で固定されます。確認しだい次の指示を出します。」

「はいはいと。」

「最後に両手両足を描かれている手形、足形に合わせた後、『完了』と言って下さい。これはあなたの測定同意も兼ねています。声紋認証後に測定を開始します。」

「同意い。そんなこと聞いてねえぞ。なにやら怪しい気もするが、やるしかないな。手形に足形、これか、そしたら・・・『完了』。」

「声紋認証、照合率99.8%。本人確認完了。ただいまから測定を開始します。気持ちを落ち着け、無心になってください。」

測定中、測定中

・・・。

しばらく経つても何も起こらない、機械もうんともすんとも言わない。いや、体が浮いているような、暖かくやわらかい液体の中に浸っているような感じがす・・・。

「うつ、うああああー」

突然目の前がはじけたと思ったら、今度は世界が急回転、急収縮したような感覚にとらわれる。

「深刻なエラーが発生しました。深刻なエラーが発生しました。エラーコード193398、検体の安全を確認後システムをシャットダウンします。繰り返します、深刻な・・・。」

それまで何の反応も見せなかった装置から大音量の警告音が発せられる。だが、そのときすでに俺の意識はとうに遠のいていた。

ここは・・・何処だ、俺は・・・何を。徐々にだがつつすらと意識が戻ってきた。確か測定室に入って、装置をつけて、暫くしたら突然、やめよう思い出そうとしたら頭が痛くなってきた。

「うっ。」

「む、どうやら目を覚ましたようじゃな。」

「ここは何処だ、あんたは誰だ。」

「わはは、惜しいのう。そこは『私は誰』じゃろ。そんな顔をしなさるな。うむ、順を追って説明しよう。ちよつと長くなるかもしれんがの、疲れが残っているようだったら遠慮せずに休んでくれかまわんからな。まずわしについてじゃが、わしはここ清鏡^{せいぎょう}皇院^{こういん}付属病院の教授兼医師というところかのう。」

「なんだって、清鏡ってあの清鏡か。世界で初めて創世を教育に導入したっていう。」

「うむ、そのとおりじゃ。そもそも3校ある皇院の中でも最も歴史ある皇院じゃからのう。別段驚くことはあるもつて。さて、話を戻そうかの。おぬしは気を失ってからどのくらい経ったか分かるかね。」

「1日、長くて2日ってとこかな。」

「残念ながら正解は1週間じゃ。」

「なに、いったい何があったんだ、俺の体に異常でも見つかったのか、なあ。」

さすがに1週間眠り続けたとあっては冷静にしろというほうが無茶だろう。俺はすぐにも情報が得たく、じいさん教授に掴みかかるうとしたが、体がほとんど動かないことに気づいた。

「ふう、そりゃ動けんのもしかたあるまいて。長くなるといったじやろう。こんな事態は今までなかったんじゃ。こんな事態とは言うまでもなく例のエラーのことじゃ。あの測定機にはさまざまなセンサーが取り付けられており、検体　ここではおぬしのことじゃなの身体に異常が出るとすぐに停止し、深刻なものになるとオートシヤットダウンするようになっておる。」

「じゃあ俺の身体が深刻な状態つてのに陥ったわけか。」

「いいや、ところがおぬしの場合はそうとも言い切れん。本当は出るはずのないエラーなのじゃ。標準的な創世使いの能力値、あー、創子量は百から千の間じゃ。そしてあの装置には理論上10万程度の創子にも耐えられるように造られておる、さらにエラーコード193308、これはその数値を振り切り、システムが耐えられなくなったときに出される緊急コードなのじゃよ。言っていることが分かるかの。」

「つまり測定機のトラブルじゃなかったら、俺の創子量は10万以上あるってことか。」

「そういうことになるのう。そして緊急コードがここに転送されてすぐわしらが駆けつけたんじゃが、装置のほうに問題は見当たらなかった。」

「じゃあ俺は……。」

「そうじゃな、本当に10万以上の創子量を誇るのなら『化け物』じゃな。少し前までは能力値が創子量だけで扱われてきたのじゃが、そのときに4千ちよつとの創子量を持つ男がいた。わしが知る中で

一番の創子量じゃった。ただ、やつは自らの驕り故に破滅の道を歩んだがの。すまんの、こんな話をおぬしにするのは酷だったかの。ところで、おぬしの場合、システムが終了してしまつて属性もよくわかつたらん。ほかにも分からないことはあるんじゃが、今のところはこれくらいじゃ。」

「俺はバケモノ・・・。」

「心配しなさんな、おぬしは人じゃよ。解析のことはわしに任せておれ、ただし絶対に守ってもらいたいことがある。今話したおぬしの状況を絶対に他言しないでもらいたい。わしも各方面に情報操作は怠らないつもりじゃが、おぬしがばらしてしまつたら大変なことになる。再び戦争が始まるやもしれん。そしてもう1つ、これから創世学を学ぶじやろつが、本気を出してはならんぞ。創子量の限界が5千程度になる封を施しておいたがそれとて万全ではない。なにしろわしが本気を出してその程度までしか抑えられなかったのじゃからの。くれぐれも気をつけるのじゃ。」

「この両腕のリングが封だな、分かった。そうだ、名前と聞いてなかつた。いろいろお世話になつたから名前を教えてくださいな。」

「わしは風間陵太郎じゃ。何か分かつたら連絡しよう。それではな。」

その後数日間、付属病院でお世話になり、やっと身体が自由に動かせるまで回復した。

03： アクシデント（後書き）

久しぶりの更新でした。説明が大部分を占めています。清鏡皇院のこととか説明せずに終わってしまいそうで心配です。これからやっ
ていけるのでしょうか？いまのところ手書きの下書きどおりに進め
て行っているのですが、設定が「気・に・入・ら・な・い」のです。
しかしどうか書き直しは避けたいものです。

04：力の流れ（前書き）

前回「久しぶり」と書きましたが、今回も「久しぶり」です。
どうやら「久しぶり」の感覚を見直す必要がありそうです。

04：力の流れ

「連一、おはよう。一週間も休んで体大丈夫？」

この様子じゃあよっぽど心配したのだろう、何人かのクラスメイトも寄ってきた。

「そうだぜ、俺たちは親友なんだからな。お前の身に何かあったらと思うと、うつつうつつ。」

またはじまった。だけど半分は本気なんだろう桂悟の気遣いが十分すぎるほど伝わってきた。

「みんな、心配かけて悪かった。測定機が突然壊れたらしくて、俺に影響がないか調べてたらしい。結果は特に異常なしのことだ。」

「そう、それはよかったわ。春斗君なんて、次元翔先輩に頼んでなんとか・・・とかいつてたよ。さすがに先輩でも何でもできるわけじゃないでしょうにね。」

確かにあいづらい。すでに崇拜の域に達しているように思えてくる。しかし、何とかじいさん教授に言われた通りに口裏を合わせることができたようだ。ここで「能力値が10万以上あって装置が壊れましたー。」なんて言ったら確かに問題になっていただろうことは想像に難くない。

「俺がいない間にこっちでは何かあったか？」

「ええと、クラス替えがあつてね、これからの授業は能力値別に分

かれるみたいなの。一番上がA、それから順にB、C・・・となるそうよ。」

「2年だけじゃなく、3年から5年までが能力別に分かれるからひよっとしたら、いや、まずないが高名な先輩と同席する可能性があるってことだぜ。ちなみに6年は完全に卒業研究一筋だからクラス分けは適用されないってわけだ。たしか配布された資料の中にそういったことがあったから転送しておくぜ。」

「それで発表はもう終わっちゃったけど、私はVクラス。風間君は確かQクラスだったよね。」

「ああ。クラスは各個人ごとデバイスに通知が来たから、もし来てないんだったら職員室に聞きに言ったほうがいいぜ。」

「うっわ、職員室かよ。あそこは嫌いなんだよな。俺が以前学校をサボって絞られてから近寄りたくねえんだよ。」

たとえその過去がなくても生徒はあまり職員室に入りたがらない。入り口は2重になっており、外側は堅牢な^{ピージヨタイト}褐晶石の扉、内側は防音性に優れた^{アスロタイト}鮮青石の扉だ。その構造ゆえに、職員室はまるで異空間のような雰囲気醸し出している。ちなみに校長室はさらにすごいらしい。

「ふふ、そんなこともあったわね。それよりどういう風の吹き回しかしら、こここのところ連も遅刻せずに学校に来るようになったじゃない。やっぱり口では創世学に興味はないとか言っておきながら実はあつたりするんじゃない?」

「ほら、躊躇してないで覚悟を決めて行って来い。」

背中を押されてしぶしぶ職員室に向かうことにした。普通に考えれば俺は最底辺だろう。しかしこの前の事件からAクラスということも考えられる。まてよ、そんなことしたらみすみす能力値を体现することになりかねないからその線はないか。職員室の前に着くとお決まりのフレーズが流れる。

入室には学生証の提示が必要です。右の端末にかざしてください。

確認を終えると次は鮮青石の前の声紋認証。これも通過し、職員室に足を踏み入れる。何だつてこんなに緊張しなきゃいけないんだ。そもそも学生証なんていまどきIDでいいだろ。最新だか旧世代だか分かりやしない。一見して変わったところはないのだが、窓はなぐ外の様子をリアルタイムで内側に映し出す、リアルタイムシーンウィンドウ（通称：RSW）がはめ込まれている。壁は明らかに強度がある褐晶石できており、空調も整っている。俺は先生のところまで行くと、早速クラスを尋ねた。

「おお、お前のことは皇院から連絡を受けているよ。せつかく遅刻しなかったというのに災難だったなあ。クラスは”Q”ということだ。その連絡を受けたときは驚いたな、何がってそのクラスにだよ。私はてつきりZだと思っていたよ、わはは。おっどうした、体の心配？してないぞ、してるわけがないじゃないか。お前はいろいろな意味で変わっているからな。あれくらいのことでは心配には及ばん

そういいながら背中をバンバンとたたいてくる先生。俺は早めに切り上げることにした。先生といつまでもこんな話を続けるつもりはないし、なにより居心地が悪いつたらありゃしない。こんな密閉空

間じゃそれこそ体を悪くしそうだ。

今日の授業も終え、俺と夏美は帰途に就いている。

「ねえ、私さびしいな、なんで連がQクラスなのよ。絶対おかしい私、連がZクラスなんじゃないかって心配してたのに別の意味でシヨックよ。」

Zクラス・・・なんかどこかで聞いた気がするが、気にしない気にしない。

「そんなこといわれても、能力値以外にクラス分けの基準はないんだからどうしようもねーじゃねーか。」

「うう、私が言いたいのはそのういうことじゃなくって・・・もういい。」

そのままぷいっと顔を横に向けてしまった。まったく俺の何がいけないってんだ。こと恋愛に関してはつくづく鈍感な連なのであった。

「あっそうだ、こうしましょ。明日、明後日と私と創世の予習をするってことで。どうせ土日だから何も無いでしょ。」

「までよ、だから何で俺がそんなことしなきゃいけないんだよ。第一、予習っ。」

「んっもう、5時間目の終わりに先生が言ってたじゃない、『来週の授業までに”力の流れ”が視えるようにしてくること。』って。分からなかったらデータベースかライブ裸子を見るなり先輩に聞けっつてさ。」

「はあ、力の流れ？まったくわけが分からないな。」

「そうよ、だからデータベースでちょっと調べてきたんだけど、この世の中にはさまざまな力が満ちていてその濃度の違いによって”力の流れ”が視覚的に認知できるってあったよ。」

「そんなもん視ようと思って視られるんだったらとつくに……あっ、ん、あー……。。」

「もーなんなのよ。はっきりしなさいよ。」

「えーと、あれのことか？」

俺は一点を指差す。そこには水の中に濃い砂糖水を混ぜたときのアレのようなものが漂っていた。実は最近妙なものが視えるなど思っていたのだが、見間違いだということにしてきたのだ。

「あれってなによ、何も無いじゃない。」

「なんていうか、うっすらと青い帯のようなものがその辺に広がってんだけど。」

「もう、からかわないでよね。そうやってごまかそうとしてるんですよ。そうはいかないからね。じゃあ明日、場所は中央公園に1時。」

ばいばい、と挨拶を交わしてからそのまま走り去ってしまった。別
にからかっているつもりはないのだが、どうも俺はいろいろとおか
しいようだ。はたしてこれが”力の流れ”なのだろうか。今日も俺
はぼんやりと家の扉を開く。

04： 力の流れ（後書き）

12月中に後1回は更新したいのですが、このままの設定でいいのかまだ踏ん切りがついていない状況です。

05： 精霊庭（前書き）

すみません、早速矛盾が……。というか設定ミスです。01で5年制となっていたのに04では6年生が登場してはおりませんかorz

ということで01の方を修正しました。これからもこんな感じでミスが出てくると思うので、発見した方は指摘してくださると幸いです。

05： 精霊庭

今俺は昨日の約束どおり中央公園のベンチに腰掛けている。時間は12時30分、

「よし、ばっちりだ。」

べつに夏美と会うからいい格好をするということはないのだが、集合時間を守るのは紳士として当然だ。・・・っと親父に教えられた親父がいたのかって？健在だ。ただし、家にはいない。俺の親父は常に海外を駆け回っている・・・らしい。なに、はつきりしろだと？実はこれについては俺自身もよく知らない。

親父とお袋は俺がまだ小さい頃からそんな感じだ。

俺の誕生日なんかは必ず帰ってきて盛大に祝ってくれる。だからなのか、俺はそれを寂しいと感じたことはないし、いてくれるだけで十分だと感じている。どうだ、俺っていい奴だろ、見直したか？

「ねえ、連。さっきから声かけづらかったんだけど。大丈夫？」

「おっおう、夏美。おまえいつの間に。」

「『いつの間に』、じゃないわよ。まったくいくつになっても変わらないわね。いい加減意識して直してみたらどう。」

これが俺の癖の二番「考え事がぶつぶつと漏れる」である。まあさすがに全部漏れる訳じゃないらしいんだけど。

「『』である。『』じゃないから。もう付き合いきれないわ。行きまし

よう。」

「ああそうだ、予習だったな。まったく、俺はこんなコントをするために来たんじゃないぞ。それで、どこかあてはあるのか？」

俺たちは『来週の授業までに”力の流れ”が視えるようにしてくること。』というクエスト、もとい課題をこなさなければならぬ。ん？俺も人並みにはゲームも嗜むのだよ、ははは。で、さっぱり分からないのだ。それで夏美に半強制的に集合をかけられた。しかしどうやら夏美にはあてがあるようだ。

「そうね、そのク・エ・ス・トをクリアするために先輩に相談しようと思ったのよ。どうやら先輩に相談することは認められているみたいだしね。」

夏美が浮かべる笑顔の裏には俺への皮肉がこべりついている。しかしどういいうわけか
これがまた心地よく感じてしまう。

「ほーら、さっさといくわよ。」

夏美が案内してくれたのはそれこそ「どこのお城？」と突っ込みたくなるようなバロック建築のお屋敷だった。こんなのこの町にあったのかという疑問はすぐに解決することとなるのだが、広大な敷地の真ん中に建っているらしい。

「なあ、お前の知り合いにこんな金持ちいたっけか。」

「ふふーん。聞いて驚かないでね。なんとここは - 精霊庭 -、泉先輩の家なのだー。」

「うっそ、ほんとかよ。っておい、答えになってないぞ。なんでいつのまに知り合いになったんだよ。」

「えーとね、実はいろいろあつてね。・・・こんにちはー、聖嶺2年の白石です。臯先輩に会いに来ました。」

夏美がそういうや否やどこからともなく1柱の白く輝く精霊が現れる。これが聖霊、全身から黄色を帯びた白い力の流れがうかがえる。あれ、おかしいな。また力の流れ？

「承知いたしました。お通りください。」

「これは精霊が話しているのか。すごい確かに圧倒されるのも領けるな。」

「へへ、そうよ。自我を持っているのは中位精霊以上なんだけど、中位精霊ですら召還にすぐく力を使うの。でも臯先輩の両脇にいる2柱はもつとすごいわよ。うわさでは上位精霊にも匹敵するんじゃないかって。」

しゃべっている間にやっと玄関についた。後ろを振り返ると門が遠い。庭広すぎだって、外から建物が見えるはずないじゃないか！と誰ともなしに突っ込む連、

「そうね、さすがにこの距離は疲れちゃうわ。」

と、相変わらずの夏美。そこに

「とびげ。」

と扉の向こうから大人びた女性の声。

「おじゃまします。」

出迎えてくれたのは俺と同じくらいのすらつとした長身の女性。髪はシルクよろしく白銀に輝き、鼻は高く、落ち着いた感じのドレスを着ていていかにも「お嬢様」な感じだ。

「こんにちは、あら、そんなに硬くならなくてもいいわよ。上がって。」

そんなに硬くなっていただろうかと思つて隣を見てみると、ガチガチに固まった夏美いた。こいつも実はあまり親しいわけではないのかなと思う。

「お久しぶりです、先輩。」

「お久しぶり、そちらの方は？」

臯先輩がこちらを向いて、ドキツと思わず胸が高鳴る。

「え、ええーと、私の幼馴染みで同じクラスの連です。今日は先輩にお尋ねしたいことがあつてきました。」

「あの、穂高連です。よろしく願ひします。」

さすがに自分から挨拶しなきゃまずかろうと思つてのことなんだが、こころなしが声が震えてしまった。

「あらあら、そんなに緊張なならないで。私は5年の春宮^{はるみや}。春宮^{はるみや}って呼ばれるのはあまり好きじゃないから、臯^{はるみや}って呼んでくれるとうれしいわ。」

「連、思いつきり敬語だね。」

「しゃーねーだろ、あんな先輩にため口きけるかって、それにお前こそ・・・」

「あら、お2人で何をお話しているのかしら、私にも聞かせていただけますか？」

「いえいえ、なっなんでもないです。」

何の皮肉もこもっていない笑顔で言われるとあせってしまふ。

「実は聞きたいことってのは、力の流れを視る方法なんです。俺たち来週までに視えるようにしないとイケなくて。」

「ああ、あのことね、うふふ。どうしようかしら・・・本当は私たちみんな先生方に口止めされているのだけれど、私隠し事は嫌いなよね。」

「おねがいします。」

「あの、私からも。」

「うふ、しょうがないわね。私が言ったってことは内緒ね。それとほかの人にも言っちゃダメ。それでその方法についてなのだけど、実は現段階でそれは無理なの。月曜日に先生からお話があると思う

わよ。」

えっ、と俺と夏美は2重の意味で驚く。

「だから、力の流れ『エクシード』っていうんだけれどね、視られないはずなのよ。先生方はあなたたちに難度の高い課題を出し、創世はそう簡単に使いこなせるものじゃないってことを実感させたいのでしょう。そのとき私もできなかつたから心配いらないわよ。」

「でつても、連は。」

「俺視えるんです。今先輩から出ている白い力の・・・エクシードが。」

言つと先輩の目つきがキツと鋭くなる。そのまま俺の内側まで見透かしているような目でじつと俺を捉える。

「あなたは・・・微弱だけれどエクシードが漏れているわ。本当はそんなことありえない。何者かに操作されているか、潜在的に創世の扱い方を知っているか。前者は門のところで検査済みだから後者か、あるいは・・・あなたいつたい何者なの？」

急に厳しい目つきで問いただされる。有無を言わせない雰囲気にはすべてを話しそうになつたが、

「あら、ごめんなさい。私つたら生徒会と創世のこのことなるとつい。言わなくても結構ですよ。ただ、この段階でエクシードが視え、さらに自身から漏れているなんて通常じゃ考えられないから、授業で習うまではあまり目立たないほうがよろしいわ。」

「はい……。」

いつだかじいさん教授に釘を刺されたことを思い出す。

「私はやらなければならぬことがあるから、また今度、わからないことがあつたらいらっしやいなさいな。夏美、ファイト、ですよ。」

「はいっ、ありがとうございます。」

俺はその言葉の意味を図りかねた。まあ夏美のことだからいいか。」

その後の帰り道はあまりしゃべらなかつた。ああはつきりと普通じゃないなんていわれると、少し傷つく。夏美自身も負い目を感じているようでしゃべりかけてこなかつた。ただ、夏美の場合はそれだけじゃないようで、

「がんばらなくちゃ、ファイト、私。」

とつぶやいているのだった。

05： 精霊庭（後書き）

なんだか主人公のキャラがいまいち掴めません。悠々自適が根本にあって、それでありながら几帳面で、真面目なところがあって、ただし恋愛には疎くて・・・そんな感じにしたかったのですが。文章で表現するのは難しいですね。

本当はこのあとに場面が切り替わる予定だったのですが、少し多くなってしまったので次回分にします。

これで今年分はおしまいです。ここまで読んでいただき、ありがとうございます。

それでは皆さん、よいお年を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8346i/>

聖嶺学院 創世学科(仮)

2011年3月15日22時13分発行